

【氏名】 深 豊幸 (ふか とよゆき)

【所属大学院】 (助成決定時) 同志社大学大学院アメリカ研究科博士後期課程

#### 【研究題目】

カリフォルニア州の「ネイティヴ・サン」: 第一次世界大戦後に同州で排日運動を指導した「白人」に関する考察

#### 【研究の目的】

本研究は、米国西部で展開された移民排斥運動の原因を歴史的に考察する研究の一環として、20世紀初め、特に第一次世界大戦後にカリフォルニア州で展開された排日運動を取り上げ、その原因について再調査することを目的としている。この運動については、これまで数多くの研究が発表されてきた。そして、それら研究のなかでは、排日論者として活動した「白人」が日本人に対して行った差別的な言動が大きく取り上げられ、排日運動は同州の「白人」住民が日本人に対して「人種偏見」を抱いて展開されたものといった説明が繰り返し述べられてきた。しかし、そのような説明だけでは、当時のカリフォルニア社会において、いったい何が原因して排日が唱えられるようになったのか、まだ明らかになっていない。本研究は、当時の時代背景のなかで排日運動を捉え直し、「白人の人種偏見」という言葉による説明に留まらない、さらに踏み込んだ排日の原因について追及し、その運動への理解をさらに深めていく。

#### 【研究の内容・方法】

研究を進めていくには、先行研究のなかで、第一次世界大戦後にカリフォルニア州で展開された排日運動に深く関わっていたとされる「白人」団体4つ、ネイティヴ・サンズ・オブ・ザ・ゴールデン・ウエスト (Native Sons of the Golden West、以下 NSGW と記す)、アメリカン・リージョン、カリフォルニア州支部 (American Legion, Department of California)、カリフォルニア州農民共済組合 (California State Grange)、カリフォルニア州労働同盟 (California State Federation of Labor) に注目する。その理由は、これまでに排日運動について扱った研究では、その運動のなかで起こった出来事、排斥の対象となった日本人が主な研究対象とされ、実際に排除・排斥といった行動を起こした人々について調査されることはほとんどなかったからである。「人種偏見」を大きく取り上げて排日運動について説明した研究のなかでは、排日を訴えた人たちは「白人」という言葉だけで簡単に理解されてきたと思われる。本研究では、新しい着眼点をもつためにも、その運動を展開した当事者、「白人」や彼らの団体に注目して研究を進めていく。また、本研究では、先に挙げた4団体のなかでも、とくに NSGW に注目する。その理由は、NSGW が「ネイティヴ・サン (Native Son)」と呼ばれるカリフォルニア州生まれの「白人」によって構成され、第一次世界大戦後までに同州の「白人」団体として発展してきた団体であったことに付け加え、戦後、強硬に排日を唱えた人々のなかには NSGW の会員が多かったことがこれまでの調査で明らかになっているからである。また、NSGW の組織としての特徴から、カリフォルニア州独特の「白人」である「ネイティヴ・サン」が抱いていた考え方やものの見方について分析し、その運動を指導したと考えられる、彼らの視点から、日本人が排斥の対象となっていた原因について探っていくことは、当時の時代背景を考慮して排日運動をとらえなおしていくうえで重要であると考えているからである。

### 【結論・考察】

戦後の排日運動に関わった「白人」の側から排日運動について調査した結果、その運動は、当時のカリフォルニア社会で高等教育を受け、社会的に指導的な役割を担っていた政治家や法律家、そして、そのような人たちの友愛団体 (Fraternal Society) として発展してきた NSGW によって展開されていたことが、当時の新聞記事等でその運動に関与したことが確認された「白人」、約 250 人を対象とした調査で明らかとなった。また、他の 3 団体で排日運動に活発に参加していた人たちのなかには NSGW にも所属していた人も多く、それら 3 団体が排日運動に乗り出した背景には、そういった NSGW の会員の影響が見られることも明らかになった。排日運動の原因に関しては、排日運動で中心的な役割を担っていた NSGW の会員、「ネイティヴ・サン」の視点から調査した結果、彼らは、戦後、アジアで勢力を拡大しつつあった日本が、やがてその勢力圏を米国太平洋岸地域にも伸ばしてくるかもしれないと恐れ、「白人の楽園 (White Men' s paradise)」として発展していくことを強く望んでいた、彼らのカリフォルニアが侵略されないよう、その地で日本人の数が増加し、彼らの勢力が強まらないよう、排日を唱えるようになったことが明らかとなってきている。このような日本に対する脅威は、これまで「黄禍 (Yellow Peril)」というイメージで捉えられ、アジアの黄色人種を偏見視する「白人」がもつ見解の一例として簡単に理解される傾向があった。しかし、今後は、20 世紀初めにカリフォルニア州で排日運動が起こっていた頃には、「黄禍」は実在したものの、「ネイティヴ・サン」と呼ばれる同州の「白人」の間ではアジアで勢力を拡大し勃興してきた日本に対する実際の脅威として捉えられていたものとしてみなし、それを排日運動の原因を明らかにするための鍵として見て、さらに研究を進めていく。